

フィールドが面白くなった時 — 想定外の楽しさで新たな自分と出会う —

フィールドが面白い！と感じる瞬間は色々ある。当初の目的が達成された瞬間は当然嬉しい。でも、それだけじゃない。フィールドには自分の想像を超える楽しさもあるのだ。

理系の研究者として入ったフィールド

僕は森や畑で窒素などの栄養分がどんな風に生態系を循環しているのかについて研究しており、中部アフリカに位置するカメルーンという国を調査地としていた。年間降水量1,500mmで、年平均気温が23℃のこの地域には真っ赤な土が広がっているのだが、森とサバンナがモザイク状に成立しており、何とも中途半端で不思議な景観をしている(写真①)。土壤も気候も同じなのに植生が違う。そんな状況で現地の農家の人たちは、どちらの植生でもそれぞれ焼畑を行っていた。森を焼いた後に作った畑には主にバナナやラッカセイ、トウモロコシ、カカオなどを栽培する一方、サバンナを焼いた後はキャッサバやトウモロコシがメインとなり、栽培する作物が元の植生によって異なるのである。はて、それはなんでだろう？もしかして、土の中の養分の

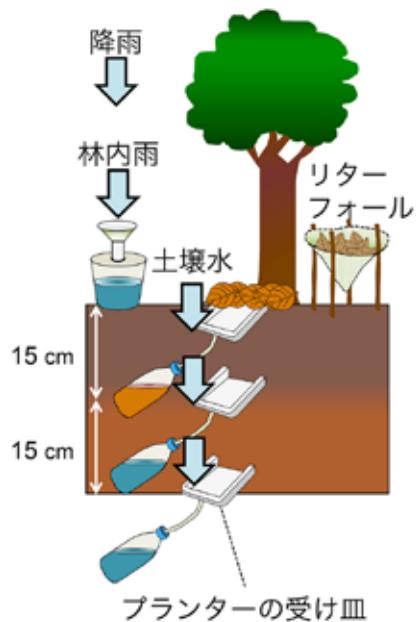
動き方が違うのかな？それが、研究を始めた最初の問いだった。

サンプルを集めるだけなのに

いざ、農家さんの森や畑をお借りして疑問を調べてみることに。そのために、落ち葉を集めるためのネットや雨を採取するバケツと、土の中を流れる水を採取する装置を設置した(写真②)。一年間にどれだけの養分が雨や落ち葉として土に落ちて来るのか、そのうちどれぐらいが植物に吸われるのか、或いは土の中を深くまで流れ去ってしまうのかを計測することで、養分の行方を追っていく(写真③)。装置を埋める作業は重労働なのだが、それさえやっしまえば、後は



写真①森林サバンナ境界帯



毎月溜まった落ち葉や水を集めるだけ。とても簡単な作業だ、と思っていた。一ヶ月に一度サンプルを採取するだけなのだから。ところが、そうは問屋が卸さない。採取する「だけ」の作業の
 はずが、苦難の連続なのである。熱帯ならではの旺盛な植物の成長力によって伐った樹の新芽が一カ月もすればバケツをすっぽり覆ってしまう。そうかと思えば、野生動物がバケツをひっくり返してしまう。シロアリが土に埋めた装置を食べてしまう(写真④)。気象データを取る機械に雷が落ちてしまう。畑に蒔いたトウモロコシの種はリスに食べられてしまう。新芽は鳥についばまれてしまう。やっどこそ成長したものは大きなネズミに茎の根元をかじられ倒れてしまう。ようやく実がなったと思ったら村の子ども

69



写真②落ち葉(リターフォール)を集めるネットと森の中の雨(林内雨)を集めるバケツ



写真③土の中を浸透する水(土壤水)を集める装置

たちに食べられてしまう。こんな状態で本当にデータが取れるのだろうか。次回のサンプル採取まで、気が気じゃない日々を過ごす。何度サンプルが取れずに悔しい思いをしたことか。一ヶ月に一度、溜まった落ち葉と水を集めるだけなのに、たったそれだけのことができないのだ。何とかうまく取れたら、日本に持ち帰ってラボで成分を調べる。そしてまたフィールドへ戻る。すると、また必ず何か壊れている。ひたすらにその繰り返しである。トラブルは未然に防ぐものだと考えていたのだが、そんなことは不可能だった。フィールドではトラブルは必ず起こるもの。何かが起こった時の対応力、判断力こそが肝要なのである。

これが大学院での研究生活？

村での生活はといえば、停電続きで電気はほとんどこないし、必要な水は遠くの井戸まで汲みにいかなければならない(写真⑤)。市場もないので勝手が分からないうちは木の実を食べて暮らしていた。家の裏で水浴びをしていると、わざわざ40km離れた街から買って来たフランスパンがヤギに食べられていた。サンプルの落ち葉を家の外で乾かしていたら、隣の豚に食べられていた。論文でも読もうかと暗闇のなか懐中電灯をつけると、自分の顔ほどの大きさもある蛾が

飛んできた。仕方なく星が瞬く夜空を見上げてしんみりしていると、蚊に刺されてマラリアにかかってしまった。フィールドは鬼か。まるで、ここから出て行けと言われているようだった。自分が思い描いていた「研究生活」なんてものは



写真④シロアリに侵された土壌水採取装置



写真⑤村人は自分で使う水を自分で運んでこなければならない

どこにもなかった。ただ生きることに必死なのである。こんなはずでは…。大学院生なのに論文も読まずにサバイバル力を養っている場合なのか。自問自答をしたけれど、できることは必死にサンプルを集めることだけだった。フィールドを生き抜く力は、データを取る為に最低限必要な条件だったのだ。そんな状況でもやっとの思いで分析を進め、出てきたデータをグラフにすることができた瞬間、それはもう言い表せないほどの悦びが待っていた。森とサバンナでは養分の回り方が全然違うぞ！知的好奇心が強烈にくすぐられ、それまでの苦労はこのためだったと思える、涙ちょちょ切れる感動の瞬間。忘れられない至福のひと時である。万感の思いがこもったグラフ。フィールドとは何てやりがいのある所なのだろう。当初の目的が苦難の末に達成されたのだから、とっても嬉しかった。

71

村人とのつながり

僕は理系の研究者として土と向き合ってきた。朝から晩まで森や畑で作業をし、夜は寝泊まりしている家に直接帰る。特に村の中を歩いたりしなかった。自分が研究者になろうと思った理由も、誰も知らない事を知りたいという好奇心だったり、自分自身が成長したいという思いが強かったからであった。誰かの役に立ちたいと

か、困っている人を助けたいという感情は正直あまりなかった。冷徹な人間かもしれないが、何かを客観的に数字で表すことが好きで、そういう評価が難しい主観的な「人間」にはあまり興味を持っていない、と思っていた。だから語学も必要最低限しかできなかったし、村人と敢えて接点を持つともしなかった。土のデータを出す為に村に入っていると信じていたし、それだけで十分に楽しかった。村に入っているというよりは、村の宿泊所に寝泊まりしながら調査地点と往復しているだけだった。しかし何度も村に通い続けると、村人と触れ合う機会も増えてくる。すると、彼らの声が耳に入ってくるのだ。「お前は何年もこの村に来て、何か一つでも私たちの暮らしを良くしてくれたのか」。最初は何となく聞き逃していた。その為に僕はここに来ていないんじゃない、と思っていた。ところが自分のデータをまとめる段になった時、自分が土や農学に関わっている以上、そこには人々の暮らしがある、というごくごく当たり前の事実と直面することになった。確かに、村人の言うとおりである。こんなに村に通っていて、色々な人のサポートを受けながら研究ができていくというのに、自分の知的好奇心を満たすだけの、言わば自己満足に終始していいのだろうか。出したデータのその先に一体何があるのだろうか。漠然と、どうしたら自分の研究を村人の暮

らしに繋げられるのだろうか、と考えるようになっていた。

気がつかなかった上から目線

ところが、自分の研究成果で村の暮らしを良くしたい、などと肩をガチガチにして思ったところで急には何もできないのである。土の事こそ分かっていれど、村の事はほとんど何も知らないからだ。にもかかわらず、外部者として「先進国」から来た「研究者」である自分は、村人よりも多くの事を知っているはずで、何かを提供できなければいけない、と勝手に思い込んでいた。頭が石のように固く、傲慢だった。本当は何も知らない自分に薄々気づいているのに、気づか



写真⑥バーでの団欒

ないふりをして飾った自分を演じている。物凄い違和感。そのモヤモヤがある間は、村にいたのがあまり楽しくなかったし、村人との間には何か壁を感じていた。今振り返れば、そんな態度でいたのでは村人との距離が縮まるはずもないことに気づく。壁を作っていたのは他でもない自分自身であり、その原因は自分が上から目線であるからだという事実にはしばらくは気がつかなかった。

きっかけは偶然に

ある休日の昼下がりに、村のバーにいた時のこと(写真⑥)。偶然村人の会話に加わり、うろ覚えの現地語で、「お腹が空いたぞ。トウモロコシが食べたい!」と言ってみた。すると、いきなりたどたどしい現地語を発したことがおかしかったのか、どっと笑いが起こる。誰も持ってきてくれそうになかったので、その勢いそのまま、村の若者が良く使うスラングと訛りと仕草をモノマネして「くっそー!」と大袈裟に言ってみた。またウケる。それだけの事なのだが、なんだか楽しくなってきた。そこでふと気づいたのだ。そうか、自分は素のままの自分でいいんだ。自分も村人と同じただの一人の人間なんだ。そう開き直った途端、それまでのモヤモヤが一気に吹っ切れた。ビールを飲み、冗談を交わしながら他愛

もない話をする。「先進国」の「研究者」としてではなく、一人の人間として同じ目線で語らう。それまで立ちはだかっていた大きな壁が音を立てて一気に崩れ去った。その瞬間、それまでよりも遥かに村が好きになっていく自分に気がついた。日本から村に戻ってくるのが待ち遠しくなった。こんな感覚は以前は考えられないものだった。サンプルを取りに行かねば、とは思うことはあっても、村人に会うために村に戻りたい、などと思ったことはない。自分が、ずっと村の中に入った感じがととても嬉しくて、ますます村が好きになった。人に興味を持った。そして何らかの形で彼らの役に立ちたい、何か貢献したいと強く思うようになっていった。

73

村人から学ぶ

それ以来、それまでほとんどダメだった語学も一気に上達した。すると村の色んな話を聞く機会が増えた。村人は本当に色んなことを知っている。土に残る足跡がどの動物のものであるか、ちょっとした草のよれ具合を見て少し前にあの動物がここを通ったとか、僕には何の変哲もない景色から、本当に沢山の情報を受け取っていることに驚く。あそこには変わった土があるだとか、昔は、いま森となっているあの土地はサバンナだったんだとか、それまで自分の知ら

なかった貴重な情報がどんどん出てくる。村人はみな僕の先生である。村を歩いて彼らがどんな暮らしをしているかを見なければ、自分のデータが村の中ではどんな意味を持つのか分からない、ということに段々と感づいてきた。土だけ見ても見えてこないものがある。グラフからは読み取れない情報を見つけることこそが、理系の研究者がフィールドに入っている意味なんだろうと今は思う。

自分の知らない自分に出会う

自分は完全なる理系人間だと思っていた。ところが今、人との繋がりに面白さを感じている。環境を定量評価できて楽しいと思える自分は想像できたが、人がいるフィールドが楽しいと思える自分は想定できなかった。人間は感情で動く生き物だという重大な事実気づき、理屈だけじゃないのは自分も同じだと知った。自分にはこんな一面があったのか！驚きと新発見。自分の知らない自分に出会えること、それもフィールドの醍醐味なのかもしれない。土に興味を持って土を見てきただけのはずが、新たな自分に出会うことによってデータの解釈に深みが増していく。ああ、フィールドは面白い！

柴田誠